

# 労働者協同組合物語

## 第6回：レディ・バイロンと協同組合人

中川雄一郎（協同総研理事長 / 明治大学）

イギリスにおける初期協同組合運動の歴史にしばしば登場する女性がいる。彼女の名はアン・イサベラ・ノエル・バイロン、すなわち、レディ・バイロン（バイロン夫人）である。そう、彼女は、与謝野鉄幹のあの詩「嗚呼、我ダンテの奇才なく、バイロン、ハイネの熱なきを…」で詠われた、インドをこよなく愛したロマン派詩人のジョージ・ゴードン・ノエル・バイロン卿の夫人なのである。彼女は、社会問題に関心を寄せ、社会改良の立場から、既にこの物語に登場したウィリアム・キングと親交をもち、またわれわれが「近代協同組合運動の黎明」と称している「オウエン主義協同組合運動の世界」=「協同組合コンGRESS」(1831年～1835年)を 前回登場したウィリアム・トンプソン亡き後に 指導したハッダースフィールド協同組合(ハッダースフィールドはイングランド北部の産業都市)のトマス・ハーストに公私にわたる援助の手を差し延べた。他方、彼女は、すぐ後で見ると、ロバート・オウエンに対して批判的立場をとっており、彼女の社会思想をある程度明らかにしている。

今回の労働者協同組合物語は、レディ・バイロンの目を通してイギリス初期協同組合運動の歴史を垣間見ようとするものである。彼

女が協同組合運動に関わった時代は、産業革命が山場にさしかかり、イギリス社会の経済的、政治的变化も一段と激しさを加えていた時代であったことから、われわれは、彼女の目を追うことによって、時代がもたらしたイギリス社会の思想的、政治的な動向と協同組合運動の状況を知ることができるであろう。

### 1. レディ・バイロンとウィリアム・キング

第4回の「労働者協同組合物語」<sup>1)</sup>で述べたように、ウィリアム・キングは、1821年に Brighton に居を構え医者として活動するとともに、1824年に「共済組合」に基礎をおいた「貧民救済」を主張するエリザベス・フライの社会改良運動に共鳴して「Brighton 地区協会」を設立し、また翌年の1825年には熟練労働者や熟練職人の子弟に一般知識と専門技術を教える「Brighton 職工学校」の設立に加わり、そして1827年から協同組合運動を指導するようになるのであるが、キングが、というよりはむしろレディ・バイロンがキングと面識をもつようになるのは1827年のこの頃からである。というのは、Brighton で社会活動に携わっていたレディ・バイロンは、夫の所有地で働いている農業労働者の

生活状態を改善する方策について助言を得ようと、著名な知識人であり敬虔なクリスチャンであるキングに面識を求めてきたとき、キングは彼女に協同組合運動に注目するように助言したからである。レディ・パイロンは、かくして協同組合運動の社会的役割を学び、それ以後協同組合運動を金銭的に援助していく。レディ・パイロンが第4回協同組合 कांग्रेसでキングとともに「感謝決議」を送られたのは、協同組合運動への彼女の金銭的援助に対してであった。

しかし、レディ・パイロンは、彼女が援助しているその当の協同組合運動の思想的支柱であったロバート・オウエンの思想には必ずしも賛意を示さなかった。彼女は、オウエンの名をついに一度も口にしなかったキングの協同組合運動には大いに関心を払いかつ賛意を示したが、とりわけオウエンの「環境決定論」あるいは「性格形成論」には反対する思想的立場をとり続けた。彼女は、第4回協同組合 कांग्रेसを病気の身を押しして指導したトマス・ハーストへの手紙(1832年5月26日付)で次のように述べている。

オウエン氏は、基督教の優れた道徳性をすべて受け入れる、と考えているようですが、けれども彼は、基督教の欠くことのできない(道徳的な)力である戒めや制裁を受け入れることを拒否しているので、**「環境」が性格形成において相対的にほとんど効力をもたない、ということに気づくことになるでしょう。**なるほど、宗教的な博愛主義者たちは、彼らの影響下にいる人びとの現世の状態を無視する誤りをあまりにしばしば犯してきましたが、それだからと言って、**富裕な者と貧民との間の、同胞としての「神聖な」絆を等閑視す**

ることは、社会の福祉にとって致命的であるだけでなく、まったくの誤謬です。<sup>2)</sup>

「富裕な者と貧民」は共に「同胞」であり、「神聖な絆」を共有しているのであるから、両者は共に「キリスト教的道徳律」を受け入れるべきである、と考えるレディ・パイロンは、「戒め」や「制裁」、すなわち、「罰」や「褒賞」を認めないオウエンの「社会生活の道徳化」を「反基督教」と見なし、オウエンの「環境決定論」=「性格形成論」を切り捨ててしまう。この点で、レディ・パイロンが、一方で「協同組合は国家と教会の双方における党派や宗派から超然としているべきである」と強調しておきながら、他方で「基督教を容認することが協同組合の活力には必要である」と主張しているのは、ホリヨークが指摘したように、彼女は、「道徳性や公正性は科学・経験・人間本性のなかにどんな独自の源泉も有しない、と信じられていた一時代の心情を吐露しているにすぎない」のかもしれない。とはいえ、博愛的慈善を自分の属する支配階級の社会的使命であると思っていた彼女は彼女で、宗教心のある人たちは「オウエンは多くのことを物質的な生活環境に依拠しすぎた」と考えたので、かえってオウエンの「環境決定論」や「性格形成論」に反撥した、との認識をもっていた。もしキングが彼女のそのような認識について少しでも理解を示したとするならば、「基督教福音主義」を自分の協同思想の一つの重要な柱としたキングは、そのような「レディ・パイロンの宗教観」に何か意味のあることを見いだしたのかもしれない。事実、キングは、労働者階級が労働者生産協同組合を通じて独立する能力を取り戻すことができるようになれば、「協同組合は上流階級に利益をもたらす」



とレディ・バイロンとの関係に触れながら、協同組合人にほとんど知られることのなかった、ララヒン協同コミュニティ後のクレイグの足取りを記すこととしよう。

クレイグがアイルランドにやって来た時に最初に感じ取ったことは、(アイルランドでは)「社会的な産業組織」が欠けている、ということであった。ララヒン協同コミュニティを指導する際に彼がもっとも注意したこともそのことであった。「アイルランドの弊害を救済しようとするれば、その救済策は社会的、産業的経済の領域内になければならず、単に政治的に対応するだけではその弊害は決して解決され得ない」とクレイグは正しくも考えた。そこで彼は、ララヒン・コミュニティにおいて(青年を中心に)工業と農業の職業訓練・教育、産業の社会的組織化を講じたのである<sup>7)</sup>。小規模なララヒン・コミュニティで職業訓練・教育を講じ、コミュニティの構成員の自治に基づいて産業を組織化することはそう難しいことではなかったにしても、9歳から17歳のすべての男女に農業と園芸それに他の有用な職業を学習させ、また17歳未満の児童にコミュニティでの生活に関わるすべてのサービスを遂行させることの意味は小さなものではなかった。短期間であれ、ララヒン協同コミュニティの成功は、クレイグが賢明にも理解したように、構成員の人間の育成であり、彼らに科学的な知識や自治と自立・自律の精神を身に付けさせ、それを青少年に継承させていく手立てを講じたことにあったのである。

クレイグはその協同コミュニティを去ることを余儀なくされたのであるが、それでも彼には次に遣るべきことがあった。ララヒン・コミュニティでの産業訓練・教育という彼の経験を生かす機会をつくることであった。そ

れは、「精神的にも道徳的にも明白な利益をもって、工業的な労働と農業的な労働とが交互に行なわれる」「産業学校制度」を促進することであった。

クレイグがララヒン・コミュニティを去った直後、レディ・バイロンと彼女の仲間は、「成功裡に運営されるならば、一種のモデル学校になり得る...農業学校を、ロンドン近郊に設立すること」を提案した。そして彼女たちは、「その農業学校では、定められた目的のために選抜される一定数の青年が、将来設立されるかもしれない同様な学校の教師として育成される。そのために、さまざまな必要な施設を備えた十分な数の建物のある、良質の農地10~20エーカーを取得するか、あるいは賃借する必要があるが、そのために多くの基金を費やす必要はない」とのことを公表した。この提案を知ったクレイグは、早速マンチェスターからレディ・バイロンに宛てて手紙を書き送った。間もなく彼女から次のような返事がクレイグのもとに届いた。

(設立される農業学校の)場所は、ロンドンから8マイル以内の所となるでしょう。基金の総額は未だ確定されておりません。したがって、上記の計画全体を実行することについての絶対的確定性は現在のところはない、とあなたはお思いになることと思いますが、しかし、有能な校長が見つかるならば、土地付きの昼間学校が直ぐにでも設立されることは、ほとんど疑いはありません。

私は、私たちの構想を実行するのに必要な行動力、経験、それに慈善心をあなたがおもちになっているという信念に強い感銘を覚えているところです。あなたに与えられるべき褒賞は、幾分かは、その学校の成



をハーストに送り、そのなかでキングの協同組合運営を批判している。

貸付金に関するあなたの申し入れに早速沿うように致しましょう。私は、...以前から、あなた方はそのような援助(貸付金)なしに協同組合の事業を経営することはできない、と考えておりました。実際のところ、『ブライトン・コーポレーター』(キングの『協同組合人』)の著者は、すべての貸付金はそれを借用する人たちの繁栄を危険に晒し、また協同組合は、それが生みだす以上の資本を管理運営してはならない、との見解をおもちのようです。しかし私は、彼の権威を大いに重んじてはいますが、実際に商業的な事業に従事している人たちが、手元にお金もなく事業を営むのは不可能である、と考えています。<sup>10)</sup>

この短い手紙には、レディ・バイロンとキングの協同組合に対する基本的な見解の相違が示されている。キングは、協同組合は労働者自身の運動であるから、労働者自身の手で共同資本を形成し、蓄積していくべきことを『協同組合人』で説いた。他方、レディ・バイロンは、協同組合が事業経営を継続しようとするのであれば、資金が必要になるのであるから、貸付金を否定してはならない、と主張しているのである。彼女は、1832年5月26日付のハースト宛ての手紙で、「ブライトン協同組合は協同組合の基本原則のいくつかから逸脱したために、完全に失敗してしまった」と記しているが、これは、貸付金を否定しても他の原則を踏み外すのであれば、協同組合は失敗する、との指摘である。また彼女は、少なくとも1832年5月以前にキングが指導したブライトン協同組合は「完全に失敗

した」と言っているが、キングへの「感謝決議」を送った1832年10月の第4回協同組合 कांग्रेसは、「完全に失敗した」はずのブライトン協同組合について何ら言及していないことから、彼女が何を意図してそう言ったのか、われわれには不明である。

前述したように、第4回協同組合 कांग्रेसはキングとレディ・バイロンの2人に「感謝決議」を送ったのであるが、その前にキングはハーストから次回の協同組合 कांग्रेसへの招聘の(1833年3月25日付)手紙を受け取っていた。そしてキングはその招聘を断る(1833年4月3日付)手紙をハーストに送る直前にレディ・バイロンに会い、招聘を断る理由を彼女に伝えている。3月29日付のハーストへの手紙のなかで彼女はこう述べている。

私は最近、ブライトンにおりましたが、そこであなた(ハースト)についてキング博士と話をしました。キング博士はあなたの手紙に満足していました。私は、彼に、同志としてまた医者として、あなたをお訪ねするよう提案しましたし、またもし彼が旅行することができるのであれば、旅行の費用を負担することも申し上げました。彼はそうしたがっておりましたが、しかし、自分の職業上の目的に傷をつけることなしにブライトンを留守にすることができるかどうかは、非常に不確実なことです。この報告につきましては、私はあなたのご返事を了と致しますので、それを思案したり致しません。<sup>11)</sup>

この手紙に見られる「同志としてまた医者として」という言葉は、レディ・バイロン自身がある協同組合と関係している「非常に危険な政治的傾向を有する秘密の労働組合を援助



もない事実であるからである。むしろ支配階級に属した彼女が、1820年代後半から1830年代にかけての激動期に労働者や貧しい人たちに注意を向けたことにわれわれは敬意を払うべきかもしれない。

レディ・バイロンは、1833年に没したハーストを看取った夫人と2人の息子の行く末を案じて、息子たちはクレイグが設立した「イーリング・グローブ農業・工業・産業学校」に入学するよう助言した。ホリヨークによれば、レディ・バイロンは、実際に、彼らの教育のために年50ポンドを3年間支払っただけでなく、ハースト夫人にも50ポンドを援助したのである<sup>15)</sup>。

- 1) 『協同組合の発見』第106号(2001/4)。
- 2) G. J. Holyoake, Unpublished Letters of Lady Byron, *The Co-operative News*, Vol. , No.2, Saturday January 1892, p.29.
- 3) T. W. Mercer, *Dr. William King of Brighton with a Reprint of Co-operator 1828-1830*, pp.53-54.
- 4) *Ibid.*, pp.152-154.
- 5) *Ibid.*, p.158.
- 6) *Ibid.*, p.158.
- 7) E. T. Craig, *The History of Ralahine and Co-operative Farming*, 1893, pp.5-6.
- 8) *Ibid.*, p.196.
- 9) *Ibid.*, p.198.
- 10) G. J. Holyoake, *op. cit.*, p.29.
- 11) *The Co-operative News*, No.4, pp.77-78.
- 12) *The Co-operative News*, No.3, p.54.
- 13) *Ibid.*, p.54.
- 14) *The Co-operative News*, No.2, p.29.
- 15) *The Co-operative News*, No.6, p.125.

